

大いに自信を得て三食嚙下の挑戦をはじめた。
驚くことに、日ならずして口からの飲食が回復。

朝食は、もう40年も前から常食にしているバナナジュースと、特性の「らくらくパン」1枚。

昼食や夕食は、「とろとろお粥」に、卵豆腐や鯛味噌、海苔、それに、マグロやカレイの煮こごりなどと多彩なメニュー。そして、3時のおやつにはプリンやアイスクリーム等。

材料を調えるのに一苦労だが、それでも、「オイシイヨ」。

と言ってくれるとそんな苦労など屁のかっぱだ。
人間、上から入れると下から出さねばならない。

運動不足のためか、便秘がひどい。

「お父さん、いうんちが出たよ」。

と、今朝のヘルパーさん。

「へー、一週間出てないんで、昨日の朝、思い切って摘便したばかりなんだけどー。よかったね」。

かつて、下剤の専用で困った経験から、「胃ろう」(PEG)から湯茶と一緒に、朝は、オリゴ糖、夜はビフィズ菌、などを入れて便通をはかった。
その結果かもしれない。

すっきりした顔を見るとほんとにホッとする。

それは、まだ三寒四温の3月のある日のことだった。

車椅子ひとつ挟む間隔で並んでいる対面^{トイメン}のベッドから、わたしの方をじつと見つめている笑顔に気づいた。そのとき、つくづくと生還の道をえらんで良かったと思った。もしも、あのときの決断がなかったら、今ごろは抜け殻のような老人が、一人暮らしの無聊^{ぶりよう}をかこっていたに違いない。

ともあれ、きびしいが平凡な日々がつづいていた。

一月はいぬる、二月は逃げる、三月は去る、と、あつというまに春が来る。毎年、四月早々には、車椅子を押して近所の公園にお花見に行く。

重い病氣とたたかいながらも、今年も元気に春爛漫の桜花をめぐる。

異常気象としかいいようのない酷暑の夏も無事に乗り切った。やがて涼風の立つ初秋の季節来。二人にとっては、まさに、かけがえのない珠玉のような日々がつづいていた。